

岐阜市歴史博物館にお預かりした社宝(2)

眞理子

今回は、伊奈波神社に奉納された宝物を取り上げます。

博物館でお預かりしている社宝には、奉納品と思われるものが何点も含まれています。狛犬のように神前に供する目的で作られたもの、祭礼など伊奈波神社ゆかりの題材で作った自作の奉納、個人所有の貴重品を何らかの動機で神庫に納めたものや、町や村の共有品の奉納など、その経緯はさまざまと思われれます。

個別に奉納されたため作品相互のつながりはありませんが、いずれも興味をそそがれるものばかりです。

そのうちから、特に興味深いものを紹介します。

図1に掲載したのは慶長七年(一六〇二)三月七日に徳川家康が出した伝馬掟朱印状の写しです。文面はこの御朱印これ無くして人馬押し立つる者あらば、その町中出合い打ちころすべし、もし左様ならざる者これ在らば、主人を聞き届け申すべき者なり」と、

馬をひく人物をデザインした朱印も写されています。

慶長七年は中山道が整備された時期で、御嵩宿などにほぼ同文の朱印状が出されました。戦国の余波を感じさせる荒々しい内容ですが、この前年に東海道の宿場にあてた朱印状には「打ち殺すべし」という文言はありません。このころの中山道筋の雰囲気を感じたのでしょうか。

これは江戸時代の岐阜町にとって大切な文書で『岐阜志略』(延享四一七四七年成立)などの地誌類の多くに取り上げられ、岐阜町民の最高責任者が預っていると考えられています。

伊奈波神社御所蔵のものは写ですが、かつては原文書が存在したようです。

昭和一〇年発行の『岐阜米屋町史』には、岐阜奉行所奥の御朱印倉に保管していたが、明治一二年(一八七九)ごろ伊奈波愛宕山に倉ごと移転し、のち濃尾震災で焼失したと述べられています。

あるいは、岐阜町民から奉行所へ移管されたのかもしれない。いずれにしても原本は見つかっておらず、伊奈波神社に写が伝えられているだけです。

この文書には宛名が欠けていますが、『岐阜志略』などでは岐阜町あてとされています。宿場となる町に向けた内容ですから、これが岐阜町あてだったとすると家康は岐阜町を宿場に設定したことになると思います。それは加納宿との関係はどうなっているのでしょうか。実は、江戸時代初頭には岐阜町が中山道の宿場であった可能性を示す史料が複数あるのです。加納新町に住んで岐阜町への輸送業務を担った熊田家の文書に加納町を宿場というようになっただのは寛永一一年(一六三四)とされる、一七世紀中ごろに出版された中山道ガイドブックには鶴沼・岐阜河渡の順で記載されています。

加納町はすでに城下町として成立していましたが、一七世紀前半には中山道ルートがそれ以後とは異なっていたことが考えられ、家康朱印状写はそれを示す可能性があるわけです。しかし宛名が

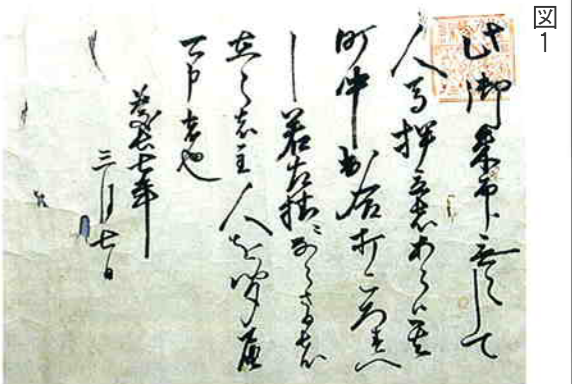


図1

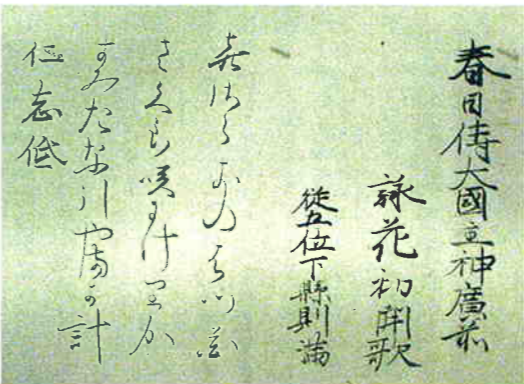


図2

伊奈波神社

無いのはなぜでしょう。写すときに書き落としたか、もともと無かったのか? また、どういう経緯で写が作られたのか? この朱印状写しは、いくつもの謎をはらんでいます。

次に、文学分野から一つ紹介します。伊奈波神社には和歌三神をまつる撰社がありますが、そのゆかりから和歌を奉納する人が多かったようです。

博物館でお預かりした「侍大國主神広前詠花初開和歌懐紙巻」もその一つです。これは大國主命をまつる撰社が伊奈波神社境内に建立されたときに、女性を含む一二人が桜を題に和歌を詠んで書きしるしたものを貼り継いだ、全長約六メートルの巻物です。作者は塩谷則満・豊田秋為・高橋古道・本誓寺の光阿・豊島夏海らで、桂園派歌人として活躍した人でした。桂園派とは、京都にあって歌壇に新風を吹きこんだ香川景樹(一七六八〜一八四三)の流派の歌人群です。

このころの岐阜町には、景樹やその子の景恒に和歌を学ぶグループができており、伊奈波神社も主であった塩谷則満もその一員でした。則満が「いなばの山」に構

えた「花の寮」では、桂園派歌人の歌会がしばしば催されました。おそらくこの「和歌懐紙巻」もそこにメンバーがつどって詠んだものでしょう。

図2は則満の和歌で、「きらさぎのはつ花ざくら咲きにけりかすみたな引くやまかげにして」と、伊奈波山の山陰にはころび始めた桜を詠んでいます。「伊奈波神社略誌」によると奉納は文久三年(一八六三)です。

最後に一点、絵画を取り上げます。「伊奈波神社祭典山車人形図巻」と題する一巻です。伊奈波神社の祭礼に各町からひきだされる山車のからくり人形一四組をアップで描いたもの(図3)に掲載したのは冒頭部分で、右から本町・中新町・笹土居町の山車のからくり人形(で、作者名はありません)が、作品を納めた箱には牧田種麿筆と書かれています。種麿(一九〇八年に七一才で没)で土佐光文に画を学び、繊細で華麗な絵を得意としました。内国絵画共進会・東洋絵画共進会で受賞するなど岐阜画壇の第一人者で、住まいは伊奈波神社のすぐそばにありました。

現在、伊奈波神社参集殿にはこ

の「人形図巻」と同じ図柄の板絵が掛かっていますが、これも種麿の手になるもので、明治二三年(一八九〇)の奉納です。翌年の濃尾震災で山車も被害を受けたことを思うと、これら種麿の残した絵は失われた山車のからくり人形の記録としても貴重なものといえます。

このほかにも、冷泉為泰筆の「二月花鳥和歌」、加納城二の丸にあつた御殿の平面図、関ヶ原合戦のときの布陣や戦闘経過をしるした絵図などもお預かりしています。関ヶ原合戦絵図は明治三一年に皇太子(のちの大正天皇)の御覽に供したもので、縦横二メートル以上の大作です。

これら博物館でお預かりしているのは「動かせる」奉納品ですが、容易に動かせない奉納品が境内には数多くあります。

鳥居や狛犬、参道の石灯笼、石橋、玉垣など、何気なく見過ごすものも、よく見ると奉納者名や年代が刻まれているのに気づきます。先人たちの伊奈波神社への信仰や祈願の心が、目に見える形で残されているのです。



図3